

# 日本人のグローバル・マイグレーションの今： イギリスにおける日本人の高齢化に関する 意識調査（1）

金 本 伊 津 子

## 1 はじめに：先達なき老いの道を歩む

高齢化は、世界が憂える大きな問題の1つとなった。近年のグローバル化の波は人々の国際移動（グローバル・マイグレーション）を促し、老いの問題はインターカルチュラルな様相を強く呈するようになった。社会・文化を超えた若者も、いずれは老いという喪失の過程を辿る。身体的な強さを失い、社会的な地位・役割を失い、家族を失うという喪失の連続を異文化という状況下で辿ることになる。

グローバル・マイグレーションによって構築されてきた多文化社会におけるエスニック・マイノリティの老いは、しばしばエイジズムとエスニシティから生起する社会的不利益の‘double jeopardy（二重の危機）’（Dowd & Bengston, 1975）、年齢に加えて文化・人種・宗教による‘triple jeopardy（三重の危機）’（Norman, 1985）に瀕しているとも、あるいは、‘cumulative dis/advantage（人生のライフ・コース全般において積み重なる不利益）’（Mutchler & Burr, 2011）にあるとも指摘されてきた。‘model minority（モデル・マイノリティ）’といわれている海外に居住する日本人、そしてその子孫である日系人もその例外ではない。

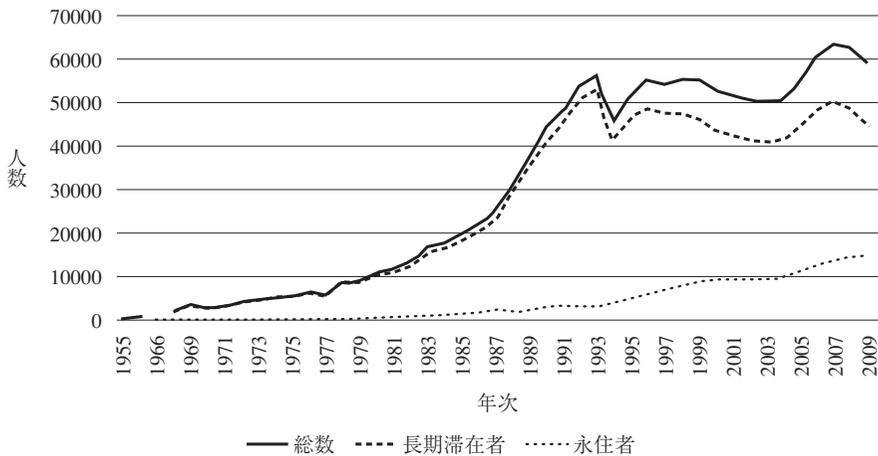
この論文<sup>1)</sup>は、ヨーロッパの中でも福祉国家と言われているイギリスにおける日本人の老いに関する量的調査の調査結果から、日本人のグローバル・マイグレーションと在外日本人の老いに関する考察を行うものである。

---

1) この論文は、2014年3月7日ロンドンの国際交流基金において実施した Public Seminar ‘Ethnic Dimension of Ageing in the UK: A Case Study of Elderly Japanese’ において口頭発表した ‘A Quantitative Survey on Ageing and Wellbeing of Elderly Japanese in London’ に加筆したものである。なお、この調査は、桃山学院大学特定個人研究費（2012年度）によるものであるが、在英日本国大使館からは調査協力とセミナーの後援をいただき、また、国際交流基金（ロンドン）から Local Project Support Programme として助成金のみならずセミナーの実施に過大なるサポートをいただいた。心より感謝を申し上げます。

キーワード：グローバル・マイグレーション、在外日本人、老い、イギリス、リターン・マイグレーション

グラフ1：イギリスにおける在留資格別日本人数



(出典：総務省統計局政策総括官(統計基準担当)統計研修所「国別、在留資格(永住・長期滞在)別海外在留日本人数」2012年)

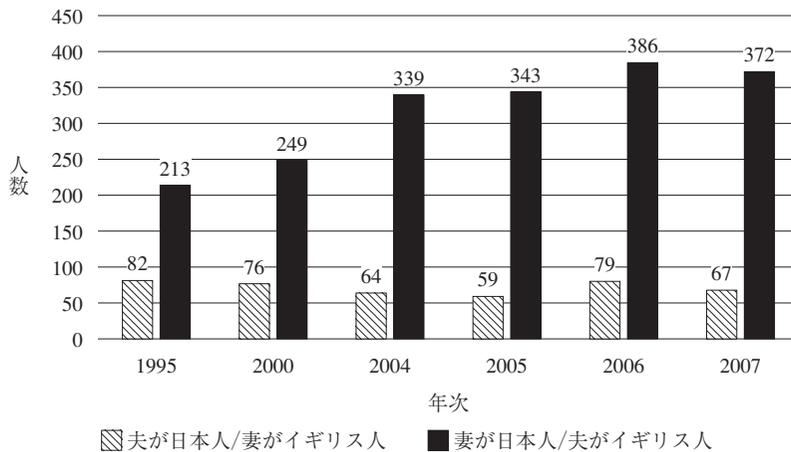
## 2 イギリスにおける日本人のマイグレーションと高齢化

海外における日本人コミュニティの高齢化の問題は、この十数年、特に顕著となってきた。これは、明治以降の日本の移民政策によって南北アメリカを中心に展開されたクラスター・マイグレーション(集団によるマイグレーション)による日本人移住者の高齢化によるものだけではない。グラフ1は、イギリスにおける在留資格別日本人数の推移を示している。1970年代以降、バブル崩壊やリーマンショック直後の数年を除けば、日本のイギリスへの投資が順調に進み日英のビジネスの絆が強くなるにつれて、日本人のイギリスへの移住は総体的に増加している。海外で老後を過ごす可能性の高い「永住者」<sup>2)</sup>は、経済の変動の大きな影響を受けることなく、穏やかな増加の傾向を示している。これは、グラフ2が示している日本人のイギリス人との国際結婚の増加とも呼応しており、特に日本人女性がイギリスに居住を移し永住者となるケースが多いことを示唆している。1970年代から少しずつではあるが増加してきた国際結婚によって外国に転居した日本人が老齢期を迎える世代に達し、老後をどのように支えあうかという問いかけが、特にヨーロッパ各地の日本人コミュニティにおいて、互いに共鳴するかのように起こってきている。

高齢期においてもなお、「国」「文化・言語」「家族」「社会保障・医療システム」を越え続けることは容易ではない。社会保障や医療システムを理解していても、配偶者や子どもと同種の老いの不安を共有することはできない。居住国に援助を求めるにも、文化的・社会的脆

2) ここでいう「永住者」は、日本国籍を有し、当該在留国から永住権を認められている者を示す。二重国籍であっても日本国籍を有する者は含まれる。また、「長期滞在者」は、3か月以上滞在で永住者でない邦人を示す。3か月以上の滞在の意思をもって在留する邦人であれば、調査の時点において滞在期間が3か月未満であっても長期滞在者とする。

グラフ2：日本人とイギリス人との国際結婚



(出典：厚生労働省「夫婦の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」2011年)

弱性を帯びる「マイノリティ・エルダリー」であることを認めるには、自立した「日本人」としてのプライドが邪魔をする。それぞれの地域・社会における高齢者福祉システムを理解し、アクティブ・エイジング（WHO 提唱）の考えに則って、日本人高齢者の文化的背景に配慮するというギャップ・フィリングの役割を担った自助的な取り組みが必要となってきた。ヨーロッパの各地で「老後を考える会」<sup>3)</sup>が設立され、様々な活動が展開されてきた。

イギリスにおける日本人のコミュニティの高齢化の問題は、1990年代中ごろから意識されるようになる。1996年にイギリスで快適な老いを迎えるための互助組織として「英国日本人居住者の会（後の「英国日本人会」）」が設立され、老いの問題を話し合う場として「紅葉会」が組織された。その後、イギリスに日本人のための高齢者福祉施設を設立する目的で Japan Care UK の活動が始まった。

しかしながら、これらの17年間にわたるボランティア活動による努力にもかかわらず、海外で迎える老いの問題に対する大きな解決を見ることはなかったし、老いの現状を理解する手立てもなかった。したがって、イギリス在住の日本人高齢者がどのような日常生活を送っているのか、どのような問題や不安を抱えているのか、どのようなニーズを持っているのかを明らかにするために、日本人高齢者の老いの鳥瞰図を描く必要があった。この論文は、これらの問いに対する答えを導き出すために、2013年に実施した量的調査の報告を行うものである。

3) イギリスにおいては、英国日本人会、JAPAN CARE UK、ドイツにおいては、竹の会、まほろばの会、ミュンヘン友の会、ライン・ネッカーの会、ライン・マインの会、ハンブルク友の会、DEJAKの会、スウェーデンにおいては、シルバー会、オランダにおいては、シルバーネットの会が設立されている。

### 3 調査方法

この調査は、イギリス（主にグレーター・ロンドン）に在住する50歳以上の日本人を対象として行った。（実際には、40歳代が3名含まれている。）ここでいう「日本人」は、国籍に基づくものでなく、自ら「日本人」であると認識している者を指す。したがって、イギリス国籍を取得した「日本人」もこの調査対象に含まれている。

筆者と英国日本人会福祉部のメンバーで質問項目と回答の選択肢を検討して、調査票を作成した（参考資料）。小グループで試験調査を行い、調査票に訂正を加えた後、本番の調査を実施した。

「日本人」全体を把握している組織が存在しないことから、この調査においては、確率によるサンプリングを行わず、convenience sampling と snowball sampling という方法を採用した（Bryman 2008）。2013年10月から12月の3か月間において、在英国日本大使館と英国日本人会の協力を得て655枚のアンケート用紙が配布され、454枚が回収された。69%という高い回収率は、このコミュニティの老いに対する高い関心を反映されたものであると考えられる。回収されたデータは、筆者がSPSS（IBM）を用いて処理を行った。以下はその結果である。

#### 3-1 回答者の社会的・文化的背景

回答者の総数は、454名である。表1が示すとおり、男性は14.5%、女性は85.5%を占めており、この調査における回答者は、圧倒的に女性が多い。最高齢者は88才の男性で、最年少者は47才の女性である。全体の70%を60代以上が占めているのが特徴の1つであるが、その中でも、60代の女性が一番大きい世代グループを形成している。

表2は、在留のステータスを性別に示したものである。男女ともにイギリス国籍を取得した者の割合は非常に少ない。日本国籍を保持したままイギリスの永住権を取得した女性が、大多数（72.6%）を占める。

表3は、性別によるイギリスにおける滞在年数を示したものであるが、30年以上滞在しているものが45.9%、20～29年が29.9%、10～19年が18.2%、10年未満が6%という分布である。70%近くが20年以上イギリスに滞在する永住者で、30年以上滞在している女性が一番多い。

表4は、イギリスに移り住むようになった理由を示している。仕事が20.6%、留学が19.1%、旅行が4.0%、配偶者とともに（結婚を含む）が49.7%であった。配偶者とともにイギリスに移住した女性が約半数（48.3%）を占めていることは特筆すべきである。

また、この表には表れていないが、回答者が、仕事あるいは留学から後に国際結婚に発展したいきさつをメモ書きしているケースも多くみられた。

表5は、国際結婚であるかどうかという質問に対する回答である。圧倒的に国際結婚をし

表1：世代別 性別による分布

				人数	総和の%
世代別	40代	性別	男性	0	0.0%
			女性	3	0.7%
		合計	3	0.7%	
50代	性別	男性	13	2.9%	
		女性	128	28.5%	
	合計	141	31.4%		
60代	性別	男性	27	6.0%	
		女性	181	40.3%	
	合計	208	46.3%		
70代	性別	男性	21	4.7%	
		女性	64	14.3%	
	合計	85	18.9%		
80代	性別	男性	4	0.9%	
		女性	8	1.8%	
	合計	12	2.7%		
合計	性別	男性	65	14.5%	
		女性	384	85.5%	
	合計	449	100.0%		

表2：性別による在留ステータス

			性別		合計
			男性	女性	
在留ステータス	イギリス国籍取得	人数	4	42	46
		総和の%	0.9%	9.4%	10.3%
	永住権取得	人数	59	324	383
		総和の%	13.2%	72.6%	85.9%
	ビザ	人数	2	14	16
		総和の%	0.4%	3.1%	3.6%
	ビザなし	人数	0	1	1
		総和の%	0.0%	0.2%	0.2%
合計		人数	65	381	446
		総和の%	14.6%	85.4%	100.0%

ている（あるいは、していた）女性が多いのが特徴である。

現在の婚姻状況は表6のとおりである。老後の生活を支えあう配偶者が不在である未婚（7.8%）・離婚（13.5%）・死別（9.5%）に分類される者が、全体の30%を占めている。これは、老後の生活における一つの不安材料ともなっていると推察される。

表3：性別による滞在年数

			性別		合計
			男性	女性	
滞在年数 10年未満	人数	5	22	27	
	総和の%	1.1%	4.9%	6.0%	
10年～19年	人数	8	74	82	
	総和の%	1.8%	16.4%	18.2%	
20年～29年	人数	21	114	135	
	総和の%	4.7%	25.3%	29.9%	
30年以上	人数	31	176	207	
	総和の%	6.9%	39.0%	45.9%	
合計	人数	65	386	451	
	総和の%	14.4%	85.6%	100.0%	

表4：性別による移住理由

			性別		合計
			男性	女性	
滞在理由 仕事	人数	45	48	93	
	総和の%	10.0%	10.6%	20.6%	
留学	人数	10	76	86	
	総和の%	2.2%	16.9%	19.1%	
旅行	人数	2	16	18	
	総和の%	0.4%	3.5%	4.0%	
配偶者ととともに (結婚を含む)	人数	6	218	224	
	総和の%	1.3%	48.3%	49.7%	
その他	人数	2	28	30	
	総和の%	0.4%	6.2%	6.7%	
合計	人数	65	386	451	
	総和の%	14.4%	85.6%	100.0%	

表5：性別による国際結婚の分布

			性別		合計
			男性	女性	
国際結婚 はい (国際結婚)	人数	17	303	320	
	総和の%	4.1%	73.4%	77.5%	
いいえ (日本人と結婚)	人数	48	45	93	
	総和の%	11.6%	10.9%	22.5%	
合計	人数	65	348	413	
	総和の%	15.7%	84.3%	100.0%	

表6：性別による婚姻状況

		性別		合計
		男性	女性	
婚姻状況 未婚	人数	0	35	35
	総和の%	0.0%	7.8%	7.8%
既婚	人数	58	254	312
	総和の%	12.9%	56.3%	69.2%
離婚	人数	4	57	61
	総和の%	0.9%	12.6%	13.5%
死別	人数	3	40	43
	総和の%	0.7%	8.9%	9.5%
合計	人数	65	386	451
	総和の%	14.4%	85.6%	100.0%

## 3-2 生活状況

表7は、一人暮らしかどうかという問いに対する回答である。半数以上（52.5%）の者が配偶者と同居しており、一方、子どもとも同居するケースは少ない。子どもとの同居が3.5%、配偶者と子どもとの同居でも、17.7%である。

子どもの居住地に関する問いに対する質問からは、子どもがイギリス内に居住していないケースが多い。主に、仕事等の関係でEU圏に居住しているケースが多い。

表7：性別による同居者

		性別		合計
		男性	女性	
同居者 一人暮らし	人数	8	93	101
	総和の%	1.8%	20.6%	22.4%
配偶者（パートナー）と	人数	39	198	237
	総和の%	8.6%	43.9%	52.5%
配偶者と子どもと	人数	15	65	80
	総和の%	3.3%	14.4%	17.7%
子どもと	人数	0	16	16
	総和の%	0.0%	3.5%	3.5%
ルームメイトと	人数	1	3	4
	総和の%	0.2%	0.7%	0.9%
その他	人数	2	10	12
	総和の%	0.4%	2.2%	2.7%
NA	人数	0	1	1
	総和の%	0.0%	0.2%	0.2%
合計	人数	65	386	451
	総和の%	14.4%	85.6%	100.0%

表8：家庭内での使用言語

	人数	総和の%
使用言語 英語	222	48.9
日本語	102	22.5
日本語と英語の併用	114	25.1
その他	5	1.1
無回答	11	2.4
合計	454	100.0

表9：英語運用能力

	人数	総和の%
レベル ネイティブのレベル	137	30.2
ビジネスでも支障はない	201	44.3
日常生活に支障はない	81	17.8
日常会話程度	16	3.5
無回答	19	4.2
合計	454	100.0

老後の生活は、同居者である配偶者との支えあいが必要な鍵を握っていることから考えると、全体の22.4%も占める一人暮らしの者は、かなりの不安を抱えていることと、将来的にはこの分類が大きくなることは容易に推測される。

表8は、家庭内での使用言語を示したもので、表9は、回答者の英語運用能力の自己評価を問うたものである。この2つの質問項目は、イギリス文化・社会への適応度を図るものでもあるが、回答者の多くが国際結婚をした日本人女性であることを鑑みると、家庭内での使用言語が英語であるケースが多くなっている。日本語は継承語として子どもの学童期に日本語学校で学ばせるケースが多いが、習得まで至らないことも多い。

興味深いケースは、高齢期になって英語が話せなくなった場合のことを憂い、成人した子どもに日本語を学ばせているという高齢者もいる。

自己評価による回答者の英語運用能力は、かなり高いレベルに集中している。ネイティブと同じレベルで法律・医療についても問題がないと答えた者が30%、ビジネスでは問題がないが法律・医療に関するコミュニケーションは難しいと感じている者が、44.3%もいる。実際は日系企業に就労していたものが多く、その実態は確かではない。セミナーにてこの結果を発表した時、参加していた日本人から失笑が起こったことから、実際のレベルは、これよりも低いものと推察される。

表10は、現在の就業状況を示しているが、フルタイム（20%）とパートタイム（16.2%）を合わせた約35%の者が、なにかしらの賃金労働に従事している。その一方で、約30%の者が退職しており、14.8%の家事専業を合わせると、45%の者が、イギリス社会との関わりが

表10：就業状況（複数回答可）

	回答者	
	人数	総和の%
就業形態 フルタイム	100	20.0%
パートタイム	81	16.2%
退職	149	29.8%
求職中	6	1.2%
家事専業	74	14.8%
介護休職中	1	0.2%
健康上の理由で休職中	2	0.4%
ボランティア活動	46	9.2%
その他	41	8.2%
合計	500	100.0%

表11：収入（複数回答可）

	応答数		ケースのパーセント
	人数	パーセント	
収入 給与	123	13.5%	27.3%
自営業の収入	74	8.1%	16.4%
配偶者の収入	163	17.9%	36.2%
イギリスの公的年金	189	20.8%	42.0%
イギリスの個人年金	125	13.8%	27.8%
日本の公的年金	84	9.2%	18.7%
日本の個人年金	30	3.3%	6.7%
不動産・投資	71	7.8%	15.8%
家族からの援助	3	0.3%	0.7%
家族の遺産	21	2.3%	4.7%
その他	26	2.9%	5.8%
合計	909	100.0%	202.0%

薄い状況であることを示している。

表11は収入の分布を示している。表10で明らかになった通り、賃金労働に従事しているものが約30%いたことから、給与所得を得ている者が27.3%いる。

一番多い回答は、189名の者が、イギリスの公的年金を受給していることである。公的年金では不十分として、イギリスの個人年金を準備している者も相当数（125名）いる。また、日本からの年金をイギリスにて受給している者（84名）もいる。いずれも複数にわたる収入によって、経済的な安定が保たれていることが示されているといえよう。

表12は、住居の所有形態を質問した結果であるが、85%近くが自己所有（67.2%）あるいは家族所有の住居（17%）に住んでいる。住居に関しては、かなり恵まれた状況にあるとい

表12：住居の所有形態

	人数	パーセント
所有形態 自己所有	305	67.2
家族所有	77	17.0
賃貸	57	12.6
高齢者専用住宅	3	0.7
その他	12	2.6
合計	454	100.0

える。また、高齢者専用住宅に入居したものは3名と非常に少ない。筆者がインタビューしたケースでは、イギリスの高齢者施設に対する不信から、最後まで自宅で過ごしたいと施設への入居を拒んでいる高齢者もいた。

### 3-3 老いの状況

表13は、老いをどのような時に感じるかという問いに対する回答を、多いものから順番に示している。「物忘れがひどくなってきた」というのが、一番多い回答であったが、「日本食への傾向が強くなってきた」という日本文化への回帰を感じると同時に、「英語を話す・読む・聞く・書くのが億劫になってきた」と感じている者が多い。「日本への帰国を考えるようになってきた」と答えた者が、67名もおり、老いの過程において日本への帰国を検討している者もいることを特筆しておこう。

表13：老いを感じる時（複数回答可）

	応答数		ケースのパーセント
	人数	パーセント	
老いの兆候 物忘れがひどくなってきた	150	19.80%	43.20%
日本食への傾向が強くなってきた	98	12.90%	28.20%
自分の親のことが気になってきた	86	11.30%	24.80%
英語を話す・読む・聞く・書くが億劫になってきた	76	10.00%	21.90%
病気がちになってきた	68	9.00%	19.60%
日本への帰国を考えるようになった	67	8.80%	19.30%
外出することが少なくなってきた	39	5.10%	11.20%
同じことを繰り返すようになってきた	34	4.50%	9.80%
配偶者のことが気になってきた	22	2.90%	6.30%
役割（仕事）がなくなった	21	2.80%	6.10%
日本語を話す・読む・聞く・書くのが億劫になってきた	17	2.20%	4.90%
その他	81	10.7%	23.3%
合計	759	100.0%	218.7%

## 3-4 アクティブ・エイジング

日本的な文化回帰を感じる老いの過程で、高齢者たちはどのような日常を送っているのでしょうか。また、どのような人々との交流を保っているのでしょうか。表14は、普段の交友関係を示したものであるが、ほぼ80%の者が、「日本人が主」あるいは「日本人・イギリス人ともに同じ」という選択肢を回答しており、イギリス人との関係より日本人との関係がやや強い側面を明らかにしている。

表15「社会活動」が示しているとおおり、約73%の者が、イギリスにある日本人の組織・グループの複数に属しており、様々なかたちで日本人との関係を保持していることがわかる。世代間の違いは、特に観察されない。

表14および15で明らかとなったように、日本人との交流が保持されている中、どのぐらいの頻度で日本人との交流がなされているのであろうか。表16は日本人とのコミュニケーションの頻度を示したものであるが、約半数以上のものが週に1回以上は、何がしかのコンタク

表14：世代別にみる普段の交友関係

			世代別					
			40代	50代	60代	70代	80代	TOTAL
普段の交友 関係	日本人が主	人数	2	53	60	24	5	144
		総和の%	0.4%	11.8%	13.3%	5.3%	1.1%	32.0%
	イギリス人が主	人数	0	28	39	21	3	91
		総和の%	0.0%	6.2%	8.7%	4.7%	0.7%	20.2%
	日本人・イギリス人 ともに同じ	人数	1	58	107	39	4	209
		総和の%	0.2%	12.9%	23.8%	8.7%	0.9%	46.4%
	無回答	人数	0	2	3	1	0	6
		総和の%	0.0%	0.4%	0.7%	0.2%	0.0%	1.3%
合計	人数	3	141	209	85	12	450	
	総和の%	0.7%	31.3%	46.4%	18.9%	2.7%	100.0%	

表15：社会活動（複数回答可）

	応答数		ケースの パーセント	
	人数	パーセント		
社会活動	英国日本人会	144	30.40%	46.00%
	イギリスの団体	84	17.80%	26.80%
	宗教団体	61	12.90%	19.50%
	県人会	30	6.30%	9.60%
	JAPAN CARE UK	19	4.00%	6.10%
	婦人会	19	4.00%	6.10%
	波の会（国際結婚の会）	14	3.00%	4.50%
	その他	102	21.6%	32.6%
合計	473	100.0%	151.1%	

表16：日本人との交流の頻度

	人数	パーセント
有効数 頻繁（週1回以上）	251	55.3
たまにある（月に1・2回）	160	35.2
めったにない	33	7.3
無回答	10	2.2
合計	454	100.0

表17：困ったときのサポート（複数回答可）

	応答数		ケースの パーセント
	人数	パーセント	
サポート 日本人以外	190	41.10%	49.90%
日本人	181	39.20%	47.50%
その他	91	19.7%	23.9%
合計	462	100.0%	121.3%

表18：余暇活動（複数回答可）

	応答数		ケースの パーセント
	人数	パーセント	
余暇活動 読書・新聞	310	18.30%	69.20%
TV・ラジオ・DVD	303	17.90%	67.60%
スポーツ・体操・散歩	288	17.00%	64.30%
旅行	260	15.40%	58.00%
コンピュータ	213	12.60%	47.50%
ダンス・音楽鑑賞・合唱・絵画	180	10.60%	40.20%
お茶・生け花・習字・日本舞踊	28	1.70%	6.30%
カラオケ	22	1.30%	4.90%
囲碁・将棋・麻雀	11	0.70%	2.50%
その他	75	4.4%	16.7%
何もしていない	2	0.1%	0.4%
合計	1692	100.0%	377.7%

トをとっていることが明らかとなった。実際は、電話やインターネットを利用してのコミュニケーションも含まれており、住居が離れている日本人の友人・知人との接触が、老後の生活の日常となっている様が伺える。「めったにない」と答えた7.3%の者は、ロンドン近郊を離れ、日本人が全くいないコミュニティで生活しているケースが多い。

しかしながら、「病気などの困ったときに家族以外でサポートをしてくれる人が近くにいますか」という問いに対して、「日本人以外」と答えた者が、「日本人」と答えた者をわずかではあるが上回った（表17参照）。

表18は、日常生活における余暇活動を示したものである。日本的と考えられる「お茶・生

け花・習字・日本舞踊」「カラオケ」「囲碁・将棋・麻雀」などに人気がないところは、他の地域（例えば、アメリカやブラジルの日本人高齢者コミュニティ）と違う特徴を示している。

### 3-5 終の棲家

表19は、「イギリスでの永住を希望されますか」という問いに対する回答を示している。46%の者がイギリスでの永住を「希望する」と答えており、10%の者が「希望しない（多くの場合は、日本への帰国を希望していることを示す）」と回答している。興味深い点は、約43%の者が、老後をどこで生活するかという将来の問いに対して、未だ見通しを立てていない点である。70代・80代の27名の者が、「わからない・決めていない」という点は、近い将来において深刻な様相を呈してくることは容易に想定できる。

表20は、イギリスでの永住を望まず、日本で老後を過ごす場合の帰国の理由を示している。

表19：世代別にみる終の棲家の選択

世代別		イギリス永住を希望			合計
		希望する	希望しない	わからない・決めていない	
40代	人数	0	1	2	3
	総和の%	0.0%	0.2%	0.4%	0.7%
50代	人数	42	17	81	141
	総和の%	9.3%	3.8%	18.0%	31.3%
60代	人数	106	20	83	209
	総和の%	23.6%	4.4%	18.4%	46.4%
70代	人数	51	8	24	85
	総和の%	11.3%	1.8%	5.3%	18.9%
80代	人数	8	1	3	12
	総和の%	1.8%	0.2%	0.7%	2.7%
合計	人数	207	47	193	450
	総和の%	46.0%	10.4%	42.9%	100.0%

表20：帰国の理由

		応答数		ケースのパーセント
		人数	パーセント	
日本に帰国する理由	日本に家族・親戚がいるから	42	40.00%	62.70%
	日本に住居があるから	18	17.10%	26.90%
	日本に親がいるから（介護も含む）	15	14.30%	22.40%
	日本の高齢者施設への入居を希望するから	12	11.40%	17.90%
	日本に職（収入源）があるから	6	5.70%	9.00%
	その他	12	11.4%	17.9%
	合計	105	100.0%	156.7%

表21：帰国の時期

	人数	パーセント
5年以内	27	5.9
10年以内	17	3.7
15年以内	9	2.0
20年以内	7	1.5
その他	24	5.3
非該当	342	75.3
無回答	26	6.1
合計	452	100.0

表22：世代別イギリスでの老後の不安（複数回答可）

	40代	50代	60代	70代	80代	TOTAL
	人数	人数	人数	人数	人数	
不安 身の周りの世話ができなくなる	2	80	120	48	5	255
病気	2	67	93	37	1	200
認知症	1	48	73	29	2	153
高齢者施設での生活	2	53	62	19	3	139
配偶者の死	0	46	62	25	1	134
配偶者の介護	1	36	49	28	1	115
食事	2	39	58	14	1	114
収入	1	63	43	7	0	114
言語	2	48	40	18	0	108
孤独	2	40	38	5	1	86
身体障害	0	25	36	8	1	70
法律関係	1	29	23	10	1	64
医療制度	2	29	21	10	0	62
日本にいる老親の介護	2	43	12	1	0	58
住居	1	31	24	1	0	57
死	2	15	18	1	0	36
家族がケアしてくれるか	0	14	7	1	0	22
配偶者の老親の介護	1	6	5	2	0	14
その他	0	2	7	6	0	15

多くの者が「日本に家族・親戚がいるから」と答えている。12名の者が、日本の高齢者施設へ入居するために帰国すると考えており、イギリスでの高齢者福祉に対する不安が如実に表れている。

帰国する場合の時期は、表21に示されている。帰国を検討している者は、表19にあるとおり50代・60代の者が中心なので、帰国した後の生活の準備や日本への再適応の過程を鑑みると、結果的に「5年以内」と考えている者が多くなっている。

それでは、イギリスでの老後の生活に不安がないかというと、そうでもない。表22は、イ

ギリスで迎える老後で不安を感じる項目を回答数の多い順に示している。一番不安に感じることは、「(自分自身の)身の回りの世話ができなくなる」ということで、その原因としての「病気」や「認知症」が挙げられている。高齢者にとって、自立しているということが非常に重要であることが示されている。

また、国際結婚をしている日本女性が多いことから、「(イギリス人の)配偶者の死」は、その後の生活に大きな不安をもたらすことになる。一般的に、子どもと同居するケースは少ないことから、配偶者の死とともに一人暮らしが始まるわけであるが、最終的にはイギリスでの高齢者施設を終の棲家と考えているケースは多い。

しかしながら、イギリスの高齢者施設での生活に不安を感じている者は多く、その中でも「言語」「食事」と回答しているものが多い。ケアラー（介護人）とのコミュニケーション言語や食文化の違いから、文化的孤立を憂える老いの語りもある。自分の日常生活に日本語・日本文化を理解する者がいない中、イギリスでの日常生活が悪く終えることができるかどうかということに対する不安は深刻である。

実際、筆者のインタビューに対して「死にたい」ともらした80代の女性もいた。この日本人女性は、身体移動が一切できないので、ケアラーの介助が必要であった。彼女のケアラーは、アフリカ系の移民女性で、力が強いのでトイレの介助等は負担なくできていたが、台所に山のように積まれていた日本食の食材からは、ケアラーに日本食を作ってもらうことはかなわなかったことが伺えた。‘Eat!’ ‘Toilet?’ など、アフリカなまりの単純な英語は理解しやすいが、ぞんざいな感じはどうしても否めない。「死にたいと思う」という日本人女性の言葉は、筆者には、異文化への降伏とも感じ取れた。一步も歩くことの叶わない彼女にとっては、いかなるケアラーであっても生存のために必要な訪問者であることには変わりにはなかった。その日本人女性は、イギリスの施設への入居を拒み続け、ついに数か月前に亡くなった。

以下の表23は、イギリスでケアが必要となったとき、希望するサービスを示している。まず、身の周りのことが自分でできなくなった場合は、「家事の援助をしてほしい」と希望する者が一番多い。「日本語・日本食中心の高齢者施設（グループ・ホーム）」を望む声は、非常に大きい。

しかしながら、イギリスに限らず、ヨーロッパのいずれの日本人コミュニティも、日本人の居住地が散在しているということや、女性が多いこと、国籍のみならず社会的・経済的基盤も多様であることから、老いに対する十分な備えができていない。南北アメリカにあるような「日本人のための施設に入りたい」「日本食を食べることできて、日本語が話せる施設を作りたい」との声は大きいですが、実現可能なブループリントができていないコミュニティはヨーロッパにはまだない。日本人コミュニティ全体で取り組むべき高齢化の問題を後回しにしてきたことで、日本人コミュニティの脆弱さが、露呈してきているといえよう。

また、イギリスでの老後を迎えるリスクを回避するための日本へのリターン・マイグレーションには、タイミングを計り膨大な準備に忙殺されることと、「古巣」であるはずの日本

表23：イギリスにおける高齢者ケアに関する要望（複数回答可）

	応答数		ケースの パーセント
	人数	パーセント	
希望するサービス			
家事の援助をしてほしい	193	14.00%	47.90%
日本語・日本食中心の高齢者施設（グループ・ホーム）の準備をしてほしい	164	11.90%	40.70%
医療・看護をしてほしい	157	11.40%	39.00%
日本食の配達サービスをしてほしい	144	10.50%	35.70%
日本人のためのデイサービス施設（高齢者同士が交流・娯楽の場）がほしい	134	9.70%	33.30%
日本語で話ができる相手がほしい	123	8.90%	30.50%
身体介護をしてほしい	108	7.80%	26.80%
日本語を理解できる介護士・看護師の支援がほしい	98	7.10%	24.30%
銀行・年金・保険の手続きを手伝ってほしい	91	6.60%	22.60%
話し相手がほしい	83	6.00%	20.60%
イギリスの高齢者施設を見つける手伝いをしてほしい	64	4.60%	15.90%
その他	18	1.3%	4.5%
合計	1377	100.0%	341.7%

社会への再適応の難しさから、実行するものは少ない。

#### 4 考 察

イギリスで老いる日本人の大半（この調査では73.4%）は、国際結婚をした日本人女性である。イギリス人である配偶者や世代の違う子どもと、老いのモデルや老後の不安を共有できることはない。経済的にも恵まれ自立した「日本人」としてのプライドは、文化的社会的に脆弱性を帯びる「マイノリティ・エルダリー」であることを自ら認めることに邪魔をする。相互扶助的な活動をするも、自らの老いの抜本的解決にはなっていないという極めて深刻な状況下にあることが明らかとなった。

快適な老後の生活を求めて日本に帰国する（リターン・マイグレーション）には、何よりも、老いのタイミングをうまく計り、煩雑な手続きを経なければならない。日本での再適応にも時間がかかる。そして、必ずしも歓迎されるとは限らない。もはや、「ふるさと」はそこにはない。そもそも自らの意志で日本を飛び出した者の老後を、だれが見てくれるのであろうか。

「国」「文化・言語」「家族」「社会福祉・医療システム」などの境界を越えたライフ・スタイルを持つ者の高齢期における尊厳は、高齢者の文化的アイデンティティと居住する国の医療社会福祉システムのせめぎあいの中にある。高齢期においては、言葉・コミュニケーション・食事などが今までより一層重要となるからである。「高福祉」と言われているイギリス

においても、高齢者の尊厳を文化装置であるケアをとおしていかに護るかという問いに対する答えは、未だ見つけられていない。イギリスの高齢者福祉の現場は、ケアラー（介護者）として従事する者の多くが移民であるという多文化的な状況を鑑みれば、日本人のみならずイギリス人として同じ状況下にあるともいえる。イギリスの高齢者ケアは、日本と比較すれば、よりインターカルチュラルな状況下であり、高齢者が自ら思うウェルビーイングを実現させようとすれば、ケアの現実と理想とのギャップを自ら埋める努力をすることが求められている。

今回の論稿においては、イギリスで迎える不安に対する自由回答をもとに、国際結婚における老いのストーリーを明らかにしておく予定である。

#### 参考文献

- 金本伊津子 2008 『多文化社会における日本人移民の老いとエスニシティに関する文化人類学的考察：平成16～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書』
- 2010 「探る—ブラジル日系高齢者のアイデンティティとウェルビーイング」鈴木七美その他編『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』pp. 117-131. 御茶ノ水書房。
- 厚生労働省 2011 「夫婦の国籍別にみた婚姻件数の年次推移」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikinihw/life/life10/03.html> (2011.11. 7).
- 在ハンブルク日本国領事館・ハンブルク友の会 2011 「在留邦人高齢者アンケート調査」
- サンパウロ日伯援護協会・金本伊津子（監修）2003 『ブラジル日系社会高齢者実態調査（要介護者老人実態調査）』サンパウロ：サンパウロ日伯援護協会
- 総務省統計局政策総括官（統計基準担当）統計研究所。2012 「国別、在留資格（永住・長期滞在）別海外在留日本人数」<http://www.stat.go.jp/data/chouki/02.htm> (2012.11.8)
- ニューヨーク日系人会・邦人日系人高齢者問題協議会 2006 「在米邦人・日系人の『高齢者問題に対する意識調査』」
- 三原博光 2011 「ドイツに住む日本人の方々の老後の意識調査」
- ラインネッカー友の会 2009 「ラインネッカー地区の在留高齢邦人の現状及びドイツの施策、施設に関する報告書」
- Bryman, Alan. 2008 *Social Research Methods*. Oxford: Oxford University Press.
- Chappell, Connery. 2005 *Island of barbed wire: the remarkable story of World War Two internment on the Isle of Man*. London: Robert Hale
- Cresswell, Yvonne (ed.). 2010 *Living with the wire: civilian internment in the Isle of Man during the two World Wars*. Douglas: Manx National Heritage.
- Dowd, James J. and Bengston, Vern L. 1975 Social Interaction, Age, and Ethnicity: An Examination of the "Double Jeopardy" Hypothesis (unpublished paper).
- Iino, M. 1989 *Japanese Americans in contemporary American society: a 'success' story?* The Japanese Journal of American Studies 3: 115-140.
- Ishizuka, Misa and Shibata, Hiroshi. 2001 Migration and old age: Japanese women growing older in British society. *Journal of Comparative Family Studies*: 32 (4): pp. 571-586.
- Ito, A. 1974 Keiro nursing home: a study of Japanese cultural adaption. In E. P. Stanford (ed.), *Minority ageing: first institute on minority ageing proceedings*, pp. 80-90). San Diego: San Diego State University, Center on Aging.

- Ito, Keiko. 2001 *The Japanese community in pre-war Britain: from integration to disintegration*. London: Curzon.
- Mutchler, J. and Burr, J. 2011 Race, Ethnicity and Aging. In Settersten, R. and Angel, J. eds. *Handbook of Sociology of Aging*, pp. 83~102. NewYork: Springer.
- Norman, Alison. 1985 *Triple Jeopardy: growing old in a second homeland*. London: Centre for Policy on Ageing.
- Spickard, P. R. 1989 *Mixed blood: intermarriage and ethnic identity in twenty-century America*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Toyama (Kanamoto), Itsuko. 2000 *Activating ethnicity: an anthropological study of ageing among Japanese immigrants in the United States*. UMI.
- 2013 The role of active ageing in the well-being of elderly Japanese in Brazil. *Senri Ethnological Studies* 80 (*The anthropology of ageing and well-being: Searching for the space and time to cultivate life together*): pp. 97-108. Osaka, Japan: National Museum of Ethnology.
- Toyama (Kanamoto), Itsuko. ed., 2014 Ethnic dimensions of ageing in the UK: A case study on the wellbeing of elderly Japanese. *Proceedings of Public Seminar and Local Project Support Programme supported by the Japan Foundation*, pp. 6-25. Japan: St. Andrew's University.
- Tumblety, Joan. (ed.) 2013 *Memory and history: understanding memory as source and subject*. London: Routledge.
- United Nations. 2013 UN Data: a world of information.  
<http://data.un.org/Data.aspx?q=percentage+aged+over+65&d=PopDiv&f=variableID%3a34> (2013.1.30)

(2014年4月22日受理)



15 現在の収入源を教えてください。(複数回答可)

- ① 給与                      ② 自営業の収入                      ③ 配偶者の収入                      ④ イギリスの公的年金  
 ⑤ イギリスの個人年金                      ⑥ 日本の公的年金                      ⑦ 日本の個人年金  
 ⑧ 不動産・投資                      ⑨ 家族からの援助                      ⑩ 家族の遺産  
 ⑪ その他 ( )

16 あなたの健康状態を教えてください。

- ① 良好                      ② 普通                      ③ 病気がち                      ④ 援助が必要

設問17は、設問16で「④ 援助が必要」と答えた方へ

17 誰に援助をしてもらっていますか？

- ① 配偶者                      ② 子ども                      ③ 親                      ④ 兄弟・姉妹  
 ⑤ 友人                      ⑥ 介護・看護専門家                      ⑦ その他 ( )

18 身の回りの世話ができなくなったとき、誰にケアをしてほしいですか？

- ① 配偶者                      ② 子ども                      ③ 親                      ④ 兄弟・姉妹  
 ⑤ 友人                      ⑥ 介護・看護専門家                      ⑦ その他 ( )

19 普段のお付き合いについて

- ① 日本人が主                      ② イギリス人が主                      ③ 日本人・イギリス人ともに同じぐらいである

20 日本人と交流（電話での連絡も含む）されている方は、どの程度の交流がありますか？

- ① 頻繁（週1回以上）                      ② たまにある（月に1・2回）                      ③ めったにない                      ④ 全くない

21 病気などで困ったときに家族以外でサポートしてくれる人が近くにいますか？（複数回答可）

- ① はい（日本人）                      ② はい（日本人以外）                      ③ その他 ( )

22 1週間にどのくらいの頻度で外出しますか？

- ① 毎日                      ② 2～3日                      ③ ほとんど外出しない                      ④ 全く外出しない

23 どのようなサークル活動・ボランティア活動に参加されていますか？（複数回答可）

- ① 英国日本人会のメンバー                      ② 国際結婚「波の会」のメンバー  
 ③ ジャパン・ケアのメンバー                      ④ 県人会のメンバー                      ⑤ 婦人会のメンバー  
 ⑥ 宗教団体のメンバー  
 ⑦ イギリスの団体のメンバー（団体名： )  
 ⑧ その他 ( )

24 どのような余暇活動をしていますか？（複数回答可）

- ① テレビ、ラジオ、ビデオ                      ② 読書、新聞                      ③ スポーツ、体操、散歩                      ④ 旅行  
 ⑤ 囲碁、将棋、麻雀                      ⑥ お茶、生け花、習字、日本舞踊                      ⑦ カラオケ  
 ⑧ ダンス、音楽鑑賞、合唱、絵画                      ⑨ コンピュータ  
 ⑩ その他 ( )                      ⑪ 何もしていない

25 最近、老いを感じることはありますか？

- ① よく感じる                      ② ときどき感じる                      ③ あまり感じない                      ④ 全く感じない

設問26は、設問25で「① よく感じる」「② ときどき感じる」と答えた方へ

26 どのような時に、最もそれを感じますか？（複数回答可）

- ① 病気がちになってきた  
 ② 物忘れがひどくなった  
 ③ 同じことを繰り返すようになった  
 ④ 外出することが少なくなった  
 ⑤ 役割（仕事）がなくなった  
 ⑥ 英語を話す・読む・聞く・書くのが億劫になってきた  
 ⑦ 日本語を話す・読む・聞く・書くのが億劫になってきた  
 ⑧ 自分の親のことが気になってきた  
 ⑨ 配偶者の親のことが気になってきた  
 ⑩ 日本食への趣向が強くなってきた  
 ⑪ 日本に帰国することを考えるようになった  
 ⑫ その他 ( )

27 イギリスでの永住を希望されますか？

- ① はい                      ② いいえ                      ③ わからない・決めていない

設問28-1・2・3は、設問27で「② いいえ」と回答された方へ

28-1 帰国される理由は何ですか？（複数回答可）

- ① 日本に親がいるから（介護を含む）                      ② 日本に家族・親戚がいるから  
③ 日本に職（収入源）があるから                      ④ 日本に住居があるから  
⑤ 日本の高齢者施設への入居を希望するから  
⑥ その他（                      ）

28-2 いつごろの帰国を考えていますか？

- ① 5年以内                      ② 10年以内                      ③ 15年以内                      ④ 20年以内  
⑤ その他（                      ）

28-3 日本で迎える老後の不安はありますか？

- ① ある（具体的な内容：                      ）  
② ない

設問29-1・2・3・4は、設問27で「① はい」または「③ わからない・きめていない」と回答された方へ

29-1 イギリスで老後を迎えるにあたっての不安はありますか？（複数回答可）

- ① 言葉（コミュニケーション）                      ② 食事                      ③ 家・住むところ                      ④ 収入・経済的状態  
⑤ 病気                      ⑥ 身体障害                      ⑦ 認知症                      ⑧ 医療・健康にかかわる法律関係  
⑨ 遺言や遺産の譲渡などの法律関係                      ⑩ 自分で身の回りの世話ができなくなること  
⑪ 家族がケアしてくれるかどうか                      ⑫ 夫・妻が要介護状態になること  
⑬ 夫・妻に先立たれること                      ⑭ 日本にいる両親（家族）の介護  
⑮ 配偶者の両親の介護                      ⑯ 高齢者施設での生活（食・言葉なども含む）  
⑰ 孤独                      ⑱ 死                      ⑲ その他（                      ）

29-2 イギリスで迎える老後の不安を具体的にお書きください。（挨拶状の裏面もご利用ください。）

29-3 自分で身の回りのことができなくなったとき、どうしたいですか？

- ① 家族による介護、もしくは在宅ケアを利用しながら、自宅で生活したい  
② 高齢者用住宅か高齢者用施設に行きたい  
③ その他（                      ）

29-4 あなたがイギリスでケアが必要となったとき、希望されるサービスは何ですか？（複数回答可）

- ① 話し相手がほしい  
② 日本語で話ができる話し相手がほしい  
③ 銀行、年金、保険などの手続きを手伝ってほしい  
④ 家事援助をしてほしい  
⑤ 身体介護をしてほしい  
⑥ 医療・看護をしてほしい  
⑦ イギリスの高齢者施設を見つける手伝いをしてほしい  
⑧ 日本食の配達サービスをしてほしい  
⑨ 日本語を理解できる介護士・看護師の支援がほしい  
⑩ 日本人のためのデイサービス施設（高齢者同士の交流・娯楽の場）がほしい  
⑪ 日本語・日本食中心の高齢者施設（グループ・ホームを含む）の準備をしてほしい  
⑫ その他（                      ）

30 将来に向けての準備をしていますか？

- ① 何もしていない                      ② 遺言書の作成  
③ 医療委任状の作成                      ④ 成人後見人の登録  
⑤ 高齢者用住宅やナーシングホームについて調べている  
⑥ ファイナンシャルプランニングを立てている

31 イギリス在住日本人の高齢化にむけて、英国日本人会・福祉部は相互扶助を促進する活動をしていますか、ご存じですか？

- ① 知っている                      ② 聞いたことはある  
③ 興味がある                      ④ 活動に参加したい                      ⑤ 知らない

ご協力ありがとうございました。

---

# Japanese Global Migration Down to the Present Time (1): A Quantitative Survey on the Wellbeing of Elderly Japanese in the UK

TOYAMA (KANAMOTO) Itsuko

In recent decades, ageing has become one of the world's most pressing issues, especially in highly developed countries such as Japan and the UK. In addition, the pressures of globalization and migration are making ageing an increasingly intercultural process. Those who cross social and cultural borders eventually grow old and experience a series of losses in physical strength, social utility or family relationships in an intercultural context. In a multicultural society like the UK, many elderly people from ethnic minority groups find themselves in a type of 'double jeopardy,' suffering from both racial discrimination and ageism.

The amount of Japanese migration to the UK has been gradually increasing since the 1970s. Consequently, the UK has become home to one of the biggest expatriate Japanese communities in the world since the 1990s. Japan's increasing investment in and expanding business links with the UK have facilitated the mobility of Japanese individuals to the UK, and later some of them have become permanent residents in the UK. The number of intermarriages between Japanese and British nationals has also stabilized.

In the process, the Japanese community in the UK has become aware of its own rising age. In order to share their experiences with ageing and to facilitate the idea of active ageing among this community, in 1996, the Japanese Association in the UK was established and organized to discuss health care problems and to help people plan for an active and fulfilling retirement life. Later, Japan Care UK was also formed to coordinate activities for the elderly Japanese in the UK.

Notwithstanding these groups' voluntary efforts over the last 17 years, the ageing issues faced by Japanese in the UK have become more serious and intense. Recently, the number of elderly Japanese who urgently need culturally sensitive care (e.g., language support, Japanese food delivery, conversational partners) seems to have been growing very rapidly. It can be easily assumed that their need for care will continue to intensify in the very near future. Ironically enough, however, the stereotype of the Japanese in the UK as a model minority has prevented the elderly Japanese in the UK from being seen as a discrete group in need of culturally sensitive care. They have been invisible, and therefore, the problems arising from their ageing process have been ignored as well.

Following research questions are addressed in this research: how have the elderly Japanese lived and aged in the UK? What are their needs in everyday life? How can the ethnic community

contribute to the wellbeing of their elderly? This quantitative survey will examine the living conditions of the elderly Japanese in London and illustrate their needs in everyday life.

This research is supported by Tokutei Kojin Kenkyuhi at Momoyama Gakuin University (St. Andrew's University), the Japan Society for the Promotion of Science, the Japan Foundation (UK), and the Embassy of Japan in the UK.